

政治的体験の概念と精神科学的方法(五)

——スメント憲法理論再構成の試み——

三宅 雄彦

序 論

- 1 憲法理論としてのスメント理論
 - 2 スメント憲法理論の实践的意義
 - 3 スメント憲法理論の理論的意義
 - 4 本稿の目標・行論
- 一 スメント理論の問題視角
- 1 科学観、真理観
 - 2 大学観、ベルリン大学、ゲッティンゲン大学
 - 3 憲法學說、法史學、教會法學
 - 4 小 括(以上、七四卷二号)
- 二 スメント憲法學說の全体構造
- 三 スメント憲法學說の哲學的基礎
- 1 現實科學としての精神諸科學(以上、七五卷二号)
 - 2 精神諸科學の心理學的基礎(以上、七五卷四号)
 - 3 精神諸科學の解釋學的基礎
 - 4 小 括(以上、本号)
- 四 スメント憲法學說の再構成
- 結論と展望

三 スメント憲法理論の哲学的基礎(承前)

3 精神諸科学の解釈学的基礎

以上で概略的に確認されたのは、第一には、歴史的社会的現実を考究する精神諸科学が、その全領域での心理学的諸事実の含有から、心理学的基础づけを必要とすること、第二には、記述心理学が獲得する心的生の構造の中で、構造連関を成す表象・感情・意志の三作用が、規範諸科学を含む全精神諸科学を基礎据えること、⁽⁷⁹⁾これである。しかし、この心理学のみによる、精神諸科学基礎据えだけでは、⁽⁸⁰⁾ディルタイ本人が承認することに、素材の観点と客観性の観点で不十分であるから、次に、この心理学的定礎を補充するものとして、ディルタイの、精神諸科学の解釈学的基础づけの論理構造を解明しなければならない。⁽⁸¹⁾

一 解釈学の概要

(1) 「心理学の諸限界」まず、解釈学が、精神諸科学定礎の場面で役割分担を配分されるには、この解釈学登場を促す心理学の欠陥そのものが、即ち、素材上の難点と、客観性欠如の難点とが、画定されていなくてはならぬ。まず第一に、記述心理学の考察対象となる心的生は、それ自体直接に獲得されるのではなく、むしろ主としては、この心的生が客観化された、言語、他の諸人格、文芸作品、詩作者又は歴史家の諸外化の中に、いわば間接的に獲得される⁽⁸²⁾(GS, VII, 18f.)。

詳述すると、一つには、①心理学が考察する心的生は、自然研究の検討対象と異なり、その統握は非常に困難で

ある。つまり、外的客体を扱う自然科学は、意志作用を伴う表象作用、即ち「注意」を伴う「観察 [Beobachtung]」で、対象接近を図るが、⁽⁸³⁾だが、心的生、即ち「意識されるが故に我にとって現存在する」「状況」を扱う心理学が、同じく意志を伴う観察を対象に加えれば、その途端に対象に変容が生起し、制約なき心的生それ自体の把握を企てれば、反対に過程の流動性による妨害が把握に起⁽⁸⁴⁾こる (GS, VII, 197f.)。「自分の諸状況の覚知」には、外的感覚を媒介としない直接的付与という「決定的長所」もあるが、内的観察 (内観) による対象変容か対象保存による不定流動か、の二律背反という「諸短所」もある (198)。従って、二つには、②内的知覚の、この「諸欠陥」を代替する為に、「別の補助手段」、即ち、他人格の把握や、その他心的生の産物が利用されなければならない (198)。つまり、我独自の心的生の他に、「他の諸人格の統握」を、即ち、我固有の心的生 (或いは感情移入) の転用という「諸欠点」を付帯するが、類推に等しい手続による「他の心的生」の統握を、補充手段として用いるか (198)、更には「心理的生の对象的な諸産物の利用」、即ち、心的生の「作用する諸力の諸産物」や、合法的に構築される心理的構成部分の「確固たる諸形成体」の使用を、補助施策として取り入れるか、これが必要となる (199)。心理学は、「個々の補助手段の諸欠陥」を相互に補充して、心的生へと繋がる「多くの扉」を追求しなければならぬ (199, vgl., 18f., XXI, 25-29, 168f., 201, 255, 262, 276-278, V, 197-200, XIX, 330f.)。

次に第二に、③記述心理学の考察対象となる心的生は、「外的諸客体、他の諸人格の実在性」を措定した、「経験的意識という諸前提の内部」での、心的生に過ぎず、この外部に存在する、「外界と他の諸人格の実在性、能働と受働 [因果性]」の諸関連の客観性」については、何ら言及されていない (GS, VII, 12)。つまり、記述の上に立てられる理論は、経験的意識に含まれる諸前提の正しさを証明しなければならぬ (12, vgl., 12f., 18f., 138-145)。精察すると、一つには、④心理学が考究する心的生は、自然研究の検討対象と異なり、その本性は主観的に留まる。つま

り、我々が諸体験の中の多様な生現実の把握を試行しても、把握されるのは、我々が体験の中で知る我々独自の生という、「単数的なるもの」[Singularis]でしかない。体験の経験態様の中に含まれる、一回的なるものへの限定を、心理学の中には克服する手段は存在しない(GS, VII, 141)。従って、二つには、⑤内的知覚の、この主観性を打開する為に、別の補助手段、即ち「了解作用」が利用されなければならない。つまり、単数性、一回性という「個人体験の制限」を止揚し、「人格的」[個人的]「諸体験に、生経験の性格を付与」して、或いは、了解作用が複数の人間や、精神的創造物や共同体へと拡張して、「個別生の地平」が拡大されなければならない。心理学は、人間間の了解作用を補充して、精神諸科学に、共通性、それから一般性への通路を切り開かなければならない(141, 261, 26, 143, 156, 205, 218, 329, 315)。

(2) 「生外化と客観的精神、了解と解釈」そこで、このような、心理学の素材上の難点と客観性欠如の難点を補充するのが、生外化又は客観的精神の了解作用である。つまり、外から感官に与えられる記号から内面、精神を認識する過程として「了解作用」はひとまず把握されるが(GS, V, 318)、『この「生外化」と「客観的精神」、及び「了解作用」は若干複雑な様相を所持しており、幾らか注意が必要である(VII, 145-152, 207L)』。

まず第一に、①「生諸外化」[Lebensäußerungen]、『客観的精神」[objektiver Geist]』とは、『感官世界の中の精神の實在化』であり(GS, VII, 146)、『感官世界に現れる、精神的なるもの』の表現[Ausdruck]、『精神的なるもの』の認識を可能とする精神的なるもの表現(205)、『生の客観態」[Objektivierung des Lebens]』又は『生の諸表現」[Manifestationen d. Ls.]』である。例えば、『個人」諸共同体」[Gemeinschaften]』諸作品」(146)、『言葉、命題、身振り」[Gebärde]』挨拶言葉」[Höflichkeitsformel]』芸術作品、歴史的行為」(146)、『この間の表現、数世紀に渉る憲法又は法典の支配」[Jahrhundertelange Herrschaft einer Verfassung oder eines Rechtsbuchs]』な

どがそうである (146, vgl. 149, 208)。

尤も、この生外化には、概念、行動、体験表現と、大別三種類がある点、注意が要る。初めには、②「諸々の概念、判断、思考形成体単位 [Begriffe, Urteile, grobe Denkgebilde]」が、即ち、それが出現する「体験」や「思考連関」から独立し変動せずに、「その出現、時間や人格の変化と無関係に、思考内容の有効性」を維持する生外化、従って、それを了解する際にも、その体験や連関、即ち「心的生の薄暗い背景と充満」や「心的連関」そのものへの遡行は不要で、その「単なる思考内容」のみの思考で足りる生外化、これが第一の生外化として挙げられる (SS, 205f.)。続く③の登場は、③「諸行為 [Handlungen]」又は「行ふ [Tat]」であるが、これは、ある目的の下で精神的なるものを表現する生外化、即ち決定的運動根拠の力により生の充満から一面性へと切除され出現する生外化であり、よって、これだけの了解を目指しても、単なる規則的関連しか期待できず、これの了解には、「生連関という背景」迄は不要だが、生連関が基礎づける、行為を産出する「心的生の、諸事情に条件づけられる状況」への帰還を必要とする生外化のことである (206)。だが、④この二者と事情を全く異にするのが、「体験表現 [Erfahrungsausdruck]」である。この生外化では、内省の及ばぬ「心的連関」や、意識化されぬ「深み」から、精神的なるものが「表現」され、しかも、歪曲 [Verstellung]・欺瞞 [Lüge]・欺罔 [Täuschung] により、表現と表現される精神の間の関係が断絶されて、両者の関係につき真偽判断ではない単なる蓋然性判断しか許されない (206)。よって、了解作用の問題は、主として、この体験表現で成立する。尤も、偉大な作品の場合、創造者、詩作者、語り部からは、精神的なるものは分離されており、欺罔など生起しえず、作者と無縁の精神的内実を予め反映しようとして、作者について何か語ろうとすることはなく、また、この偉大な作品の場合は、「技術的で確実な了解」が可能となるのだが、それでもやはり、通常の体験表現の場合には、日々の生活から生じるものは、生活

上の諸々の関心の諸力の下にあり、実践的諸関心同士の闘争の中で、精神的内実を偽る表現が出現したり、解釈者自身の立場の変化で、読取り自体が変化する場合がある(202)。このように、必ずしも特定の精神内実を確実に獲得できぬ体験表現の場合には、常に、客観的な了解の問題が付きまとう訳である。

しかし、この体験表現の了解にも、要素的・了解、高次的了解、追体験と、大別三段階ある点、留意が肝心である。⁽⁸⁷⁾⑤了解作用の第一の形式として挙げられるのが、「要素的・了解作用 [elementales Verstehen]」又は「了解作用の要素的諸形式 [e. Formen d. V.]」である(GS, VII, 207)。これは、「個別の生外化の読取り [Deutung]」であり、例えば、単語や命題を成す「活字の列」から「ある言明」を知り、人の「涙」を見て「喜びや悲しみ」を知り、ハンマーでの打付けや鋸での木材切断を見て「何らかの諸目的」を知る場合の様に、個々の表現から表現されるものを読取ることである(207)。この要素的・了解は、論理の側面から見ると、表現と表現されるものとの「規則的関連」を媒介とする、表現からの表現内容の推論、即ち「類似推論 [類推]」[Schluß der Analogie]」と把握可能であるか(207)。ここで大事なものは、要素的・了解過程が依拠する基本関係、即ち「表現と、表現の中に表現されるもの」との関係である(207)。この表現と表現内容との連関が示す「共通性 [Gemeinsamkeit]」から、特定表現と表現内容との連関が推論され、生外化からここに表現される精神的なるものが類推されてくる(210)。

だがしかし、⑥当然の如く、この要素的・了解で全ての生外化は汲み尽くされない。表現者の欺罔意図の存在、生外化と了解者の距離の介在など、健全な了解の前提たる「生外化と内面との通常関係」が欠如すれば、要素的・了解では対応不能な「非確実性 [Unsicherheiten]」が噴出する(GS, VII, 210)。そこで、この疑念を排除すべく、了解作用の第二の形式として、「高次的・了解作用 [höheres Verstehen]」又は「了解作用の高次的諸形式 [h. Formen

d. V.」が登場する (210)。これは、別の生外化の援用又は全体的生連関への回帰を伴った、個別生外化の読み取りであり、例えば、実生活上の交流で、ある特定人物の性格と能力を判断するべく、当人の身ぶり、手振り、目的行動、帰属集団（職業、家族等）、これら生諸外化から、当該人物の内面を知る場合の如く、全体的連関を通じて個別生外化から精神を読み取ることである (211)。この高次的了解も、論理の観点から見れば、個別表現からの生連関全体の推論、即ち「帰納推論 [Induktionsschluss, Schluss der Induktion]」と捕捉可能であるが (211)、ここで大切となるのも、高次的了解過程が依存する基本関係である。この基本関係は、了解任務が、演劇・哲学体系・法典・宗教聖典の全体的統握、それらの把握、最深基礎・最高目的・最高意味からの根本的把握であれば、要素的了解と同様に、表現と表現されるもの「筋書きの連関、人格の性格など」との関係となるし、了解任務が、単なる個別生外化の連関の意味把握に留まらず、生外化の背後でこれを記述する原因の提示に至れば、要素的了解と異なり、「作用するものと作用されるものとの関係 [Verhältnis vom Erwirkten zum Wirkenden]」となる (212)。この表現と表現内容の連関が示す「共通性」から、特定表現と表現内容との関係が推論され、生外化からここに表現される精神的なるものが帰納されてくる (212)。

しかし、⑦予想の通り、この高次的了解でも生外化は確実に汲み出されない。利用可能な生諸外化の数の限定、基盤となる全体連関の不確定性など、理想の了解の前提たる十分な全体的生連関が欠如すると、高次的了解でも制御不能の非確実性が到来する (GS, VII, 211)。そこで、この疑問を除去すべく、了解作用の第三の、最高の形式である、「心的生の全体性が了解作用の中で実効的となる、最高の有様」としての、「追体験作用 [Nacherleben]」又は「追形成作用 [Nachbilden]」（共同生作用）が登場する (214)。これは、表現内容それ自体とは反対の順路を辿る了解作用と異なって、生外化の生起のラインに沿って前方進行する、心的生の全体性の獲得であり、例えば、叙

事詩の詩句を順に辿れば、詩作者の体験連関が獲得されたり、演劇の諸場面の連続を観れば、登場人物の生経過の諸断片が把握される如く、個別生外化の連続から、生連関の全体を獲得することである (214f)。ここで付記すべきは、心的構造連関を丸ごと了解するこの追体験が可能となるには、「自己置き入れ [Sichhinvsetzen]」、「転換 [Transposition]」、「感情移入 [Einfühlung]」が、即ち、了解者自身の経験の中に存立し、無数の事例で経験される内的連関を、常にアリアリと現在化させ準備する作用、或いは、了解任務に際して体験された己れの心的連関を現前させ、生外化の総体へと己れの自我を転移する作用 [Übertragung]、これが必要な点である (213f)。この感情移入作用を基礎として初めて、追体験作用と追形成作用が成立する。要するに、追体験とは、自己の構造連関を他の生外化に注入し、生外化の経過の通りに生連関全体を統握する作用である。

しかし、⑧兎も角も重要なのは、こうした了解、特に追体験により、現実の拡張が図られることである。「生の諸々の客観態の解釈」を通じて、「体験内で与えられるものに関する我々の知識」が拡張され (155)、歴史的資料の積極的利用を通じて、「未了解の過去への肉迫」と「歴史的知識」拡大が展開されてゆく (145)。例えば、自分固有の実存内で体験可能な宗教諸状況が狭く限定されるとしても、ある人物の書簡や文書、同時代人の報告、宗教対話と公会議の議事録、これらを徹底吟味すれば、「ルター」の、現在の我々が体験可能な範囲を超える程の権力と活力を体験することさえも、可能となろう (215)。日常生活で常に決定を下し己れの可能性を制約してゆく「生涯 [Lebensverlauf]」でも (215)、空想力を駆使すれば、多くの別の実存を体験することができよう (215f)。⁽⁸⁹⁾

(3) 「解釈術と解釈学」だがしかし、了解それ自体では、心理学の難点をカヴァーするには十分ではない。了解成功に不可欠な、了解者の主観的能力、了解の技術伝播、この二つが、了解に常に随伴するとは限らないからである。不安定な了解では問題解決には至らない。

まず第一に、①了解は「解釈術」に変成せねばならぬ。追形成と追体験に顕著な如く、了解作用の成功は、構想力と空想力という「特別の個人的天才」[besondere persönliche Genialität] 具備に決定されるからである (GS, VII, 216)。了解の成否が個人的偶然に依存せぬようにするには、生外化に追加される反復参照可能な継続的固定なる事態を利用して、この個人的天才を「技術」へと転化する、「継続的に固定された生諸外化の技術的・了解作用 [kunstmäßiges Verstehen]」、即ち「文書の中に含まれる、人間的現存在の残余の釈義 [Interpretation]」、いわば「解釈 [Auslegung] 又は釈義」「**解釈術 [Auslegungskunst]**」が、必要不可欠となるのである (217, 18f., 315, V, 309, 319, 332, 329, 95)。だが更に、②この**解釈術**は「**解釈学**」へと脱皮せねばならぬ。了解手段が天才から技術に固定されても、**解釈技術**は発案者の独占物に集結し、その伝播継承は独占者との偶然的接触に依存するからである。生外化の**解釈**は、例えば、書類・作品・伝承の一部廃棄という「テクストの純化」など、生外化の「批判 [Kritik]」なる別手法の登場を必然的に帰結し、更に、歴史経過と共に、この「**解釈と批判**」の更に別の「新しい補助手段」の発案を内在的に帰結するが、これら「**文献学的技術**」は、その発案者とその継承者の独占物となり、この技術の伝播は、(師弟関係など) 大家と伝統への「**個人的接触**」に従属してしまう (VII, 217)。**解釈術**の普及が単なる幸運に左右されぬようにするには、この**解釈術**を規則へと高め、歴史的懷疑と主観的恣意から了解作用の確実性を防禦する、**解釈「術」の科学 [Wissenschaft dieser Kunst]**、⁹⁰すわば「**解釈学 [Hermeneutik]**」が、必要不可欠となるのである (217f., 18f., 315, V, 319f., 326, 327, 332f. vgl., 218, 320)。

尤も、③**解釈学**の歴史が、以上の如く、了解から**解釈術**を経て**解釈学**へ至るとしても、**ディルタイ**に重要なのは、**解釈業務**への奉仕という**主要任務**に従事する**解釈学**ではなく、⁽⁹⁰⁾「**第二の「主要任務**」に、即ち、歴史領域への**ロマン主義的恣意と懷疑の主観性**の恒常的出現に反対し、**解釈の普遍性**に理論的基礎を付与する**任務**に従事する**解**

釈学が肝要と心得るべきである (GS, V, 331, 333)。つまり、精神諸科学の認識理論、論理学、方法論の連関の中に組み込まれた解釈学、哲学と歴史的諸科学の間の重要な結合部分、精神諸科学の基礎据えの主要部分としての、⁽⁹¹⁾ 学が是非とも必要となる (331)。

要するに、ディルタイ解釈学とは、生外化の了解の分析を基礎に、この了解に通時的共時的安定を付与する、解術と解釈学を転用して、体験作用の主観性を間主観性へと転化する為の、つまりは、精神諸科学の基礎据えの為の学問領域として位置づけられてこよう。

(4) 「小括」結局のところ、ディルタイによると、心的生の直接接近は記述心理学に十分な素材を提供せず、しかも、心的生の記述分析は意識外存在の实在性を疑問とせず、これら欠点改善には他人格や他物体の心的生の利用が不可避であり、この次善策に、概念や行為や体験表現など客観的精神の、要素的了解や高次的了解や追体験など了解作用が導入されて、体験に関する我々の知識が随時拡張されゆく。この了解作用そのものの安定化の為に、了解の技術化と科学化を目指す解釈術と解釈学の開発もあるが、心理学に豊富素材と間主観性を供給するという意味での解釈学が、精神科学の基礎据えの重要任務を展開してゆく。

二 心理学と解釈学の相互作用

(1) 「解釈学の諸限界」だがしかし、解釈学も、ディルタイの精神諸科学の基礎据え計画に、究極的解決を提示はしない。心理学と同様に、ディルタイ解釈学には、それ固有の難点がどうしても残存するからである。解釈学は心理学の受け皿にはならない。⁽⁹²⁾

詳述すると、一つには、①解釈学に期待される第一の課題、即ち、心理学の考察対象たる心的生につき、その基

礎資料を提供する任務、この解決自体が非常に困難である。つまり、例えば、「詩作」や「戯曲 [Drama]」の了解では、了解対象となる詩作の内的連関は、これが時間的でないにも拘わらず、読む作用や聴く作用など時間の一連の連続の中で初めて統握可能となるが、作品全体を通覧し終わり「諸々の場面の統一的概観」を獲得した時点では、一旦把握済みの事項は時間経過とともにその「明晰性と明確性」を喪失して、残存するのは、この統一的概観の「骸骨 [Gerippe]」のみとなる。これでは、了解は、完全実現不能の、最高度の励起を要する知的過程となる (GS, VII, 226f.)。そして、もう一つには、②解釈学に希望される第二の課題、即ち、心理学の内在限界たる主観性につき、間主観性を付与する任務、この解決自体も高度に難題である。つまり、客観的精神の了解では、「感官的に与えられた他の個別の生外化」が「個別性」から「普遍妥当な客観的了解」に如何なる道で到達可能かが未解明のままとなり、「認識理論的諸問題の中で尤も深淵な問題」として、この「他者を統握する可能性」の問い、即ち「ある知識が存在するとしても、それを知る者は他者にそれを伝達できぬ」というゴルギアスの問いが、アポリアとして残存する (V, 333f, 172, vgl. I, 176, XX, 38)。これでは、了解は、確実性未到達の、普遍妥当性と無縁の知的過程となる⁶³⁾。

そこで、③了解の心理学素材と普遍妥当性に関する二つの難点を修繕すべく再登場するのが、体験である。つまり、客観的精神の了解が確実なものになるには、了解される個別の外化各々に、了解する者の「生動性」が充塞され、強度の点で差異はあるが全個人に装備された外的世界の反映能力が投擲される必要がある (GS, V, 334)。勿論、体験と了解は「常に分けられ」、「自身の領域と他者の領域」に分属するが、他者を追体験する場合には、常に「己れの人格の諸体験への廻行的関連づけ」を同時に実行しなければならず、この意味で、体験と了解の間には「構造的連関」が成立している。他者に関して了解されるものは、自分の中に「体験」として発見され、自分が体験する

ものは、他者の中に「了解」を通じて再発見される (VII, 315)。了解と解釈学は、体験と心理学により補佐されることよって、その難点を解決することができる。

(2) 「体験と了解の相互作用」以上の結果、体験と了解の関係、従って、心理学と解釈学の関係は、恒常的な相互作用、双面依存の関係にあることになる (GS, VII, 141-145, 205)。まず、①心理学において、体験から精神諸科学が出現する。つまり、「体験」は、「我にとつての現存在 [Fürmichdasein, Dasein für mich]」、「我にとつて現存在するもの [was für mich da ist]」として出現し (現象性の命題)⁽⁹⁴⁾、要素的思考能作による体験説明により、「諸概念の秩序」など「諸々の再現」が、「直接的ライン」として、登場する (139)。加えて、体験の中には「対象的統握作用」の他に、「不安」や「苦惱」(感情作用)、「追求」(意志作用)が、「構造的意識連関」又は「構造連関」となつて登場するから (心理学的連関の命題) (139)、再現と並んで、諸々の価値、目的、規則も登場してこよう。⁽⁹⁵⁾ 要は、「生自体」から、「生経過の直観を構成する、諸々の、構成部分、規則性、関連」が浮上してくる (138)。しかし、②先の言及の通り、ここに経験される多様な生現実、個別的なもの、単数的なものに過ぎず、この欠陥を克服するには、解釈学の援用が必要となる (138)。この解釈学により、了解作用での人間の共通性が顕現してこよう。つまり、諸個人間の「共通性」が、人間の共属性と等種性の姿で、人間の対面的了解作用の前提となつて、出現し (141)、例えば、「要素的積義」を可能にする言葉の意味 [Bedeutung] と意義 [Sinn]、「言語と思考の共通性」、生外化の高次の結合がもたらす「共通性の周辺圏 [Umkreis]」など、この姿で、人間の了解過程の与件となつて、出現する (141)。しかし、③これも先に論及の通り、ここで了解される多種の生外化は、不確実なものに過ぎず、この難点を退治するには、心理学の援用が必須となる。この心理学により、体験作用での知識の確実性が補填されてこよう。つまり、他の諸人格は、己れの諸体験を媒介として了解され (145)、「生の客観態の解釈は」、「体

験作用の主観的な深み」からのみ実行される (135)。要するに、④「体験作用と了解作用の基本関係」は、「相互の条件づけの關係」、或いは、「二つの科学の恒常的相互作用」又は「二つの類別の真理の恒常的相互作用」の關係であり、この相互作用により、「生諸外化の漸進的解明」が企図される⁽⁹⁶⁾ (135)。つまり、知識の拡張を了解が担当するとすれば、知識の深化は体験が遂行する (Vgl. VII, 117-119, 143-145, 152, 205, 224f., 261, 331-318, 322, 338f.)。

尤も、⑤ここには、体験作用と了解作用の相互作用と並んで、体験・了解と表現の相互作用も、即ち「精神科学の連関の構造を基礎づける、第二の基本關係」もが存立することを忘れてはならない (GS, VII, 111)。つまり、精神諸科学が、体験と了解を基礎に存立する客観的精神であるように、歴史上の人物 (例えば、ヒスマルク) を了解するにも、人間共通の諸特徴 (例えば、プロイセン土地貴族の諸特徴) から特定事象の諸特徴 (プロイセン周辺の国際状況) まで、各種「一般的諸命題」が必要である (132f.)。体系的知識が個々の生統一体の生き生きとした統握を要するのと同様に、了解作用の完成にも、体系的知識が必要とある。ここにも、對抗的依存の關係が成立するのである (143)。或いは、体系的精神諸科学の前進が、体験の新たな深化、了解の拡張、未知の歴史的源泉の開拓、歴史的状況の拡張、これらが必要であるのと同様に、体験と了解の相互作用も、精神諸科学の偉大な前進を要求するのである⁽⁹⁷⁾ (144)。

結局のところ、精神諸科学には、体験は、了解による体験の狭隘さと主観性から、全体性と一般性の領域への離脱によって、生経験へと転化するという意味での、体験作用と了解作用の相互關係と (143)、体験的知識が生統一体の生きた把握に依拠し、且つ、個别人格の了解は、体系的知識によって初めて完成されるという意味での、体験・了解と表現の相互作用の關係と (143)、この「二重の關係 [zweifache Relation] から成り立っている」[双面的依存の關係 [Verhältnis gegenseitiger Abhängigkeit] がハルに成立する (143)。

(3) 「体験・表現・了解の内的連関、認識理論・論理学・方法論」ここに、①デイルタイによる精神諸科学の基礎据えの根本的地盤が探知され、即ち、以上の体験と了解の相補作用、心理学と解釈学の相互作用から、「精神諸科学の本質的規定」が発掘されてくる (GS, VII, 86)。つまり、「人間の諸状況が体験され」、この状況が「生諸外化」に「表現」され、「この諸表現が了解される事態 (GS, VII, 86) —— 或いは、己れの状況の確定と把握には、「自己認識の内向的方法という狭い諸限界」が随伴し、この限界から離脱するには、生による生自身のその深部までの解明としての、了解の過程が必要であり、反対に、己れ又は他者を了解するには、全種類の表現への己れ自身の生の投入としての、体験の過程が必要である、そのような事態 (87) ——、この事態こそが、精神諸科学の核心部分を論証する基盤となる。換言すれば、この、表現を通じた体験の了解と体験を通じた表現の了解とが無限に反復する事態、端的には「体験作用・表現・了解作用の連関」⁽⁹⁸⁾ [Zusammenhang von Erleben, Ausdruck und Verstehen] (87)、「生・表現・了解作用の連関」 [Zusammenhang von Leben, Ausdruck und Verstehen] が (84)、「精神諸科学の諸概念を確定的に規定する諸命題の中の「最重要の命題」、精神科学的認識の本質的見通しを可能にし、加えて、精神諸科学の範囲拡張と編成規定を可能にする、「総括的な、一つの究極的定式」となって登場する (VII, 312f.)。要するに、デイルタイ精神諸科学の核心的内実が、この体験・表現・了解の連関に所蔵される訳である。

引き続き、この体験・表現・了解の連関から、「精神諸科学の中の歴史的世界の編制」 [Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften] が探知され (GS, VII, 77) 即ち、精神諸科学の特別の行態から、「精神諸科学の編成」が発掘されてくる⁽⁹⁹⁾ (118, 152, Vgl., 88)。つまり、一方で、②精神諸科学は、体験作用又は心的生を記述・分析して、「心的生の内的連関」や「心的生の諸構成部分の等形式性」を各人の個別諸連関の中で確定し、ここから「精神史的世界の特別性、全体的編成、個別態」を心的生の「この共通性とこの連関」に織込む任務を遂行

する (V, 265)。いわば、特殊的・個別的なるものの「内的経験の中で与えられる心的連関」という一般的・普遍的なるものへの投錨作業が展開され (265)、「人間的・歴史的個別態の全体」の「全ての心的生の中の連関と共通性」からの把握作業が実行される (265)。尤も、体験の記述分析のみでは、精神諸科学の基礎づけは純主観的なものに滞留する。そこで、もう一方で、③精神諸科学は、他の体験作用又は心的生を了解・追体験して、「歴史的・社会的現実」を「生の客観化された書き下ろし」[Niederschlag] (生外化又は客観的精神)と把握し、そこから歴史的社会的現実を「一種の転換」により「全き全体的生動性 [volle ganze Lebendigkeit] 又は「精神的生動性 [geistige Lebendigkeit]」へと「還元」転置する [Zurückübersetzen] 任務を遂行する (V, 265, VII, 119f)。いわば、「転換」を通じた他の体験の「我自身の体験の充填から」の「追形成と了解」作業が展開され (V, 263) 了解作用を通じた他の生外化の「已れの諸体験の充填からの転換」からの把握作業が実行される (VII, 118)。結局、精神諸科学においては、己れ自身の心的諸状況の体験作用と、外界の客観的精神の了解作用と、「二つの側面から」歴史的世界が編制されてくる。「精神的世界の連関」は、「体験され追了解され」(VII, 119)、「体験され経験され追了解される [erlebt, erfahren, nachverstanden]」のである (V, 263f)。

この精神諸科学の歴史的世界固有の編制は、^(四)テイルタイ自身が提示する、自然諸科学の自然的世界の編制との比較により、ヨリ明晰となろう。つまり、④自然諸科学では、一方で、「観察と実験」により「諸経験の等形式的諸構成部分」が、絶対的に比較可能な諸単位 [absolute Vergleichbarkeit von Größen] として創出され (GS, V, 264 f) 他方で、「数学的構成と機械的構成 [mathematische und mechanische Konstruktion]」によりこの諸単位が「整序されるべき等種の諸現出 [Gleichartigkeit der einzuordnenden Erscheinungen]」として因果関係へと組み込まれる (264f)。いわば、自然的世界は、「抽象 [Abstraktion]」化による等種の単位の創造と、これら諸単位が

徹底した論理的体系又は「抽象的連関」への装填により、悉く「一義的な因果連関」へと結集される (V, 264f, VII, 119, 159)。しかし、前言の通り、精神科学では、一方で、追形成と追了解により客観的精神が、全き生動性としての心的既得連関へと還元され、他方で、分析と記述によりこの心的生全体が、心的生の連関構造へと組み立てられる。従って、自然科学の中の自然的世界は、外的知覚の抽象化と因果連関への構成により、因果連関として我々に対して編制されるが (VII, 153)、精神諸科学の中の歴史的世界は、客観的精神の了解と心的生の分析により、「作用連関」として我々にとって編制されてくるといえ (152)。また、自然科学は、現象を「等しいもの」として概念把握する」という意味で「概念把握可能性 [Begrifflichkeit]」をその理念とするが、他方、精神科学は、人間の歴史の個別態を心的連関から了解するという意味で、了解可能性をその理念とするといえる (V, 265, 242, Pn, 143f, 242-259, 259-267, VII, 79-88, 117-120, 153, 159, 275, XIX, 265-278, XX, 129, 157)。結局のところ、精神諸科学の本質的特徴は、「対象」と「方法」に追求されるのではなく (VII, 276)、体験・表現・了解の連関という「特別の行態」(84)、「精神の行態 [Verhalten des Geistes]」に追跡されるのである (86f)。

続けて、この歴史的世界固有の編制は、精神諸科学の重要問題、とりわけ精神諸科学の認識理論、論理学、方法論の問いの中で、ヨリ具体化されてくる⁽⁸⁵⁾。この諸々の問いを順次検討すると、⑤まず第一に、認識理論の次元では、歴史的世界固有の編制は、「知識の客観性」の理論として出現してくる (GS, VII, 309f, 313-317, 121, vgl, 138, 295f, 305, 318-322)。いわば、精神科学の認識理論は、体験・再現・了解間の実践的作用から付与される「社会・歴史・人間の客観的知識」論を、その根底に埋蔵する (314f)。つまり、⑥一つには、常に確実であるが主観的な体験作用と、常に間主観的であるが不確実な了解作用、この「体験と了解の間を精神科学的経験者が常に運動すること」で、「内容的なるものについての確然性 [Sicherheit]」が固定される (315)。即ち、不確実な了解を確実な体験で

充墳し、主観的な体験を間主観的な理解で補充することで、精神諸科学の確然性が展開する。⑦もう一つには、この体験された理解されたものと、これを把握する「精神の創造物」又は「精神的創造物」——例えば、「諸範疇」、「一般的諸概念」、「諸概念と一般的諸範疇」、法学や宗教学など「体系的的精神諸科学」——との間を精神科学的研究者が常に「交流」することで、「与えられたものの十全的再現」につき「確然性」が定礎される (316f.)。即ち、精神科学者は、体験と理解から諸概念を構築し、当該概念を体験と理解で常に充墳する作業を、例えば、法学者は、法律行為や裁判判決から法概念を建設し、当該概念に己れの体験と理解を注入する作業を、宗教学者は、宗教本質を宗教現象から抽出析出し、当該本質を体験と理解で補充する作業を、それぞれ展開する (314, 317)。言ってみれば、⑧表現を媒介とする体験と理解の相互作用、体験・理解と表現の相互作用という、少なくとも二重の意味での、体験・表現・了解連関からの客観的認識の築立を、精神科学の認識理論は追跡しようとするのである (Vgl. V, 320)。

次に、⑨論理学の次元では、精神的世界固有の編制は、生それ自体に由来する「実在的範疇 [reale Kategorien]」を起点とし、諸判断・諸概念・諸推論で編成された思考形式と思考法則を終点とする、いわゆる「解釈学的論理学 [hermeneutische Logik]」として出現して^(世)くる。いわば、精神諸科学の論理学は、体験と理解の連関から誕生する「意味」範疇を検討する実在的範疇論をその礎石に所持する。つまり、⑩一つには、心的生の分析と記述の作用、生外化の了解と還元的作用、この分析と理解の間を生外化の志向者が常に往復することで、生外化又は客観的精神——例えば、言葉、自伝、歴史、更には、音楽、演劇、造形芸術、詩作——の把握が可能となる。即ち、単語把握には、その単語を命題から一旦分離し、当該単語を命題へ再度接合する作業が、人生想起には、その過去を人生全体から一旦対象化し、当該過去を人生計画に再度組み込む作業が、そして、時代把握には、その時代を歴

史全体から一旦区分けし、当該時代を歴史経過に再度組み入れる作業が、それぞれ必要である (GS, VII, 233, 235)。この分離と接合の反復、分析と還元の連続が存立して初めて、生外化の把握が実現する。続けて、⑩もう一つには、この分離と接合の往復、全体と部分の往来が客観的精神の意味獲得を可能にすることで、生外化又は客観的精神独自の「意味 [Bedeutung]」範疇が明晰になる。即ち、意味範疇には、命題内の単語の意味、人生内での過去の意味、歴史全体内での時代の意味として、「諸部分の全体への特別の連関」(229)、「生の諸部分の全体の関係」(233)、「部分から全体への固有の関連」なる内実が、付与される (233, 230, 243f.)。この全体と部分の関連、全体内の部分の関係が伏在して初めて、生外化に、「生の諸部分の確定又は不確定の意味」(233)、「全体に対する諸部分の特定の意味」(234)、「ある部分の、全体に対する意味」が接合される (232)。加えて、⑪更にもう一つには、この全体と部分の関連から意味範疇が可能になることで、その他「価値、目的、発展、理念」など諸々の「実在的範疇」も登場する (232)。即ち、現在が想起中の過去表象と空想中の未来表象により充填されれば「発展 [Entwick-lung]」範疇が (232, 244f.)、心的生の構造と連関が諸変化の中で生の連続を形成すれば「形象化 [Gestaltung]」範疇が (232f., 236)、「快不快の肯定的又は否定的態度が「継続的対象」たる「行態の抽象的表現」で提示されれば「価値」⁽¹⁰⁶⁾ [Werte]」範疇が (241-243)、「生経過が古い経験から新しい経験への変化連続の中で心的「連関が連続性と継続性」を維持する有様が「過程の本性 [Natur dieses Vorgangs]」として提示されれば「本質 [Wesen]」が、それぞれ確立する (244)。この意味範疇の諸ヴァリエーションに現出して初めて、実在的諸範疇が成立する。要するに、⑬「意味と意義 [Sinn und Bedeutung]」(118, 71) が生統握の為の「包括的範疇」となり (232, 236)、「これら実在的範疇に続いて、体験作用と了解作用の「子孫」として、精神諸科学の「諸概念、一般的諸判断、普遍的諸理論」が組成されてゆくのだが (118f.)、言ってみれば、体験・表現・了解連関からの生外化の把握、同時に意味範

嚙の成立態様、意味範疇に続く實在的諸範疇の確立態様、少なくとも二重の意味での、体験・表現・了解連関からの論理と概念の成立を、精神科学の論理学は追求しようとするのである。

最後に、⑭方法論の次元では、歴史的世界固有の編制は、精神諸科学の方法論を(ア)心的生の心理的構造探究を担う「記述 [Beschreibung] (物語 [Erzählung])」、分析 [Analysis] と(イ)生外化の心的生外化への還元遂行を担う「外的なるものへの己れ自身の置き入れ [Hineinverlegung]」、「了解の過程の中での己れの再形成 [Umformung]」と(ウ)現出せしめる(⑮) (GS, VII, 262, vgl. XIX, 264f., 276-278)。すなわち、精神科学の方法論は、(ア)「比較的方法 [Vergleichende Methode]」と(イ)「解釈学的方法 [hermeneutische M.]」又は「批判的方法 [kritische M.]」、この二つの方法をその中心に保持する(262)。そして、精神諸科学が個別態了解をその理念とすることからすれば、精神科学の方法論は、この二つの中でも特に、実定的・歴史的・単数的なるもの又は「個別態 [Individuation]」を対象とする「比較的方法」、即ち「個別歴史的諸現出を科学的に確定する」「普遍的な比較の方法 [Methode universalgeschichtlicher Vergleichung]」、「これをその核心に保持する(265f.)。ところで、⑮一つには、生外化の了解作用は、個別態間に存立する「共通性 [Gemeinsamkeit]」のみに関連するかに見えて、実は、普遍性を基礎とした「個別態」を統握しようとする(141)。即ち、一方で、諸個人間での「体験的了解作用」の反復往来で、「共通性」基盤の相互結合、「共属性又は連関」と「等種性又は類似性」の人間世界浸透が生起し、他方で、「諸単語の意味」又は諸単語統制の「規則性 [Regelmäßigkeit]」——その他、身振り、挨拶言葉、芸術作品、歴史的行い——など、客観的精神の了解統握に、自己・他者結合的な「共通性の基本経験」又は「共通なるものの周辺圏域」拡張が要求され(141, 146, 213, V, 318)、「了解作用は、その帰結としても前提としても、共通性に専念するが如くである。しかし、了解作用の眼目は、飽くまで、普遍性提示の中の個別性把握」「個別者 [Einzel-

nes]「個別的全体 [individuelles Ganzes]」「自己価値 [Selbstwert]」これにある⁽¹⁶⁾。続けて、⁽¹⁶⁾もう一つには、心的生の体験作用は、心的生の確実性確保に専念するかに見えて、実は生外化の間主観性付帯を確保している。即ち、公理概念での説明拒否で、間主観性補充を了解と解釈学に全委任して、被意識下でのみ現在する心的生全体の分析記述に専従するが如くである。しかし、体験作用の眼目は、個別者の体験と思考の舞台が「共通性の領域」であり、我々の生遂行の場所が我々を圍繞する「雰囲気 [Atmosphäre]」であり、我々の生遂行の住かが「歴史的且つ被了解の世界」である以上⁽¹⁵⁾、また、他人格や生外化了解の基礎が、子どもの頃からの「客観的精神の世界からの養分 [Nahrung] 受け取り」に、「家族の秩序と習俗」や「母親の躰け」下での成長に、そして、話始める前からの「共通性の媒体」の浸染にある以上⁽²⁰⁸⁾、矢張り、歴史的世界の中の心的生分析、普遍性の網を被った個別性圏域、これにあると見なくてはならない。故に、⁽¹⁷⁾更にもう一つには、普遍性と個別性の錯綜が精神科学内の歴史的世界を貫通すること⁽¹⁴⁾、普遍的理論と比較的方法の錯綜が登場する^(V, 258)。即ち「普遍的なるものと個別態の結合」、又は、等種性と個別態の結合⁽¹⁸⁾^(258, 268)が精神諸科学をして、人間的生の個別態、類似性、類型を規定する始源的諸関係の探究器官ならしめ⁽²⁵⁸⁾、一般化目的に類推を自由に使用する「比較的方法」を一般的特定命題獲得の手段たらしめる⁽²⁶⁸⁾。生外化を生連関の中と、普遍性と個別性の交錯の中から把握する方法こそが、「比較的方法」である^(256, vgl. WP, 8f., VIII, 85f., 99)。要するに、言ってみれば、⁽¹⁸⁾普遍性と個別性の纏絡の有様を見据えた上での生外化統握を実現する方法という意味で、体験・表現・了解連関から方法の成立を、精神科学の方法論は追尾しようとするのである。

結局のところ、体験・表現・了解の内的連関は精神諸科学の最重要命題又は究極的定式として確定され、ここから、認識理論など重大諸議論を均衡打開する為の視点と、自然科学から精神科学を独自領野に凝固結集する為の基

準とが獲得されてくる (GS, VII, 86f.)。つまり、「体験可能なもの、表現可能なもの、了解可能なもの」の本性の中に基礎づけられる「科学のみが」、「独自の国 [eigenes Reich]」への入国を許可され (21)、歴史的世界を形造る、現存的で想起され了解された諸体験を統握せんとする科学のみが (30a)、「歴史」又は「精神の体系的諸科学」の名称を付与される (33f.)。そして、単なる「対象」と「方法」ではない (27f, 8a)、「生・表現・了解の連関」に基礎された「特別の行態」(8) 又は「固有の手続」こそが、自然諸科学にはない精神諸科学の核心圏域を保存育成し (8, 8a), この生外化の還元と心的生の分析から成る体験・表現・了解の内的連関こそが、認識理論・論理学・方法論など精神諸科学の核心問題を捕捉解決するのである。(10)

(4) 「小括」結局のところ、ディルタイによると、客観態の了解作業はその全体通覧の時間性の制約を持ち、加えて、心的生の了解作用は他者認識の確実性の問題を不問とし、故にこれら難問解決には自身の体験作用の充填が不可欠となり、その結果、この善後策に、心理学の諸難点を解釈学がカバーし、解釈学の諸失点を心理学が奪回して、体験と了解、心理学と解釈学の相互作用が継続進展してゆき、更には、両者の補充関係が形造る体験・表現・了解の連関が精神諸科学の核心特徴となり、認識理論・論理学・方法論など全論点の中心論点となる。

三 体験と詩作、体験と精神諸科学

以上のような、心理学と解釈学の交錯による精神諸科学の根本的特徴の出現と、この体験・表現・了解連関から派生する精神諸科学の基本的論点の解消により、スメント理論へのディルタイ哲学の意味が、解明されよう。厳密には、第一に、「体験と詩作」の観点を、それが、スメント自身による「政治的体験と国家思考」との平行関係指摘に関連するが故に、第二に、「体験と科学」の視点を、それが、個別科学者スメントの国家理論・憲法理論・国

法理論構築への土台根幹確保を予想するが故に、それぞれ検討しなければならない。⁽¹¹⁾

(1) 「体験と詩作」まず、①ディルタイにおいては、詩作とは、諸感情をリズムとして外化し、体験を自由に描写し再形成し、心を動かす行為の中で生き生きとした人格的行動を行うもの、即ち、全言語手段による体験描写から虚構を創出し、この実在世界から分化した世界に全体性を付与するもの、この像連関がもつ感官的活力により、力強い感情内実と、思考への有意味性を惹起するもの、これである (GS, VI, 198)。つまり、真の詩作とは、詩作を創出する者には、客体への無関心の献身を通じた、理念的現実と信仰を惹起することで、これに「心と頭」の満足を提供するものであり、詩作を受取る者には、直接的関心の世界からの離脱を伴った、虚構の迫形成からの現実の体験を手助けすることで、これにも「現在の且つ継続的な満足」を付与するものである (198)。体験と事実を素材とし、この体験を感情適合的に一般化すること (206)、言葉・リズム・韻律など全言語手段を投入して、素材を作品へと「転換 [Transformation]」すること (208f)。ここに、詩作の本質が伏在する訳である。⁽¹²⁾

そして、この詩作も、体験・表現・了解の内的連関に刻印づけられる。つまり、一方で、②歴史的世界を体験の側面から見れば、詩作は、言語の全ての手段を動員し、実在的生連関から孤立化させた対象に全体性を付与することで、体験又は社会的歴史的現実という「素材を、詩作的諸作品へと転換」する (GS, VI, 208)。つまり、詩作を通じて、「体験されたもの、事実的なもの [Erlebtes, Tatsächliches]」が、感情適合的な再形象化と一般化を通じて表現される (206)。勿論、これは詩作以外にも、絵画や彫刻を含めた描写芸術一般に妥当するが、この芸術作品の中で、登場人物の関係が織りなす「空気」と「世界」が、生現実への当該作者自身の「心的構え全体」を提示し (V, 280f)、加えて、偉大な詩作者の一連の作品全てが、「内的類似性」と「家族的親近性」の潜在と、「詩作者の血」の貫流を証拠立てさえする (281f)。その意味で、芸術又は詩作は、歴史的社会的現実を、語調・リズム・韻

律など全言語手段で丸ごと提示する作品と理解される (VI, 209f.)。要するに、天才の空想の創造物、詩作は、人間的歴史的世界を、全体的に一挙に提示してくれるのである⁽¹³⁾ (V, 273, vgl. ED, 177-183, WP, 65f.)。

他方で、③歴史的世界を了解の側面から見れば、詩作は、生の暗鬱たる連関を明るみの領域へと牽引し、統握能力に写像されるまま提示して、「体験の狭隘な圏域」の拡張を遂行する (GS, V, 276)。つまり、詩作を通じて、歴史的状况と形象の中にある人間内面の生動性が、完全に抽出可能となる (276)。勿論、ギリシャ芸術を再発見したのが古典世界を愛するルネサンス人であった如く、一定程度の他者との共感・愛情・類似性確保が前提となるが (278, 277)、この詩作を通じて、他人の心的状況が、恰も己れの心的状況の如く追体験可能となる「謎に満ちた事態」が出現し、ひいては、詩作の対象である、社会的歴史的现实全体が、漏れなく統握可能となる事態さえも登場してくる (277f.)。その意味で、芸術又は詩作は、人間的歴史的世界とその個別態を了解するための器官、即ち「生了解の器官」[Organ des Lebensverständnisses]と理解される (274, 275)。要するに、偉大な天才の創造物、詩作は、我々の現存在の地平を、全方面へ無限に拡張してくれるのである (276, WP, 66-68, ED, 164-169)。

体験・表現・了解の内的連関の中での、詩作のこのような位置づけからすると、「体験と詩作」とは (GS, VI, 207, 209, ED, 164)、詩作が、詩作者の体験、しかも、歴史的社会的現実全体を己れの内に担うものとしての体験を、全言語手段を用いて表現したものであること、そして同時に、詩作者の体験を、従って、歴史的社会的現実全体を己れの内に担うものとしての心的生を、我々に全人類の共通性を媒介として、明るみに出すものであること、と理解することができる。つまり、「体験と詩作」の関係とは、現実と現実全体を表現する詩作の関係である。

(2) 「体験と精神科学」「体験と詩作」の関係が、以上に指摘した意味で理解可能とすれば、それでは、如何なる意味で体験は、スメント憲法学説もそれに帰属しうるところの、科学の基礎となるのか、これを次に検討しなければ

ばならない。

まず、①デイルタイにおいては、科学とは、精神的世界を「作用連関」[Wirkungszusammenhang]⁽¹⁴⁾として統握し、この作用連関を、又は、確固たる形成体の中に己れを提示し、形成体の諸々の種類に応じた、論理的、美的、宗教的連関を、分解するもの、これである (VII, 153, vgl. 257)。先に論及の通り、因果連関が自然的世界を貫流する如く、作用連関は歴史的世界を貫流するもので、精神の構造に従い、対象的統握を基礎に価値を創造し目的を實在化する、「諸々の作用の連関」を指示するが⁽¹⁵⁾ (153)、精神諸科学により、歴史的世界それ自体が、或いは、歴史的世界を貫くこの作用連関が、「精神的世界の中の諸々の価値と財のこの恒常的創造の担い手」としての「諸個人、諸共同体」「社会の外的組織」、文化諸体系⁽¹⁶⁾ (153)、更には、「歴史学的連関のヨリ錯綜した諸形式」としての「諸国民、諸時代、歴史学上の諸時期」へと分解され分析される (154)。別言すれば、「諸個人、諸共同体、諸文化体系、諸国民」の中の、統握作用、価値創造、目的定立、即ち「創造作用」[Schaffen]が、精神諸科学の中で省察されるに至る訳である (154)。

そして、この精神科学も、詩作と同様に、体験・表現・了解の内的連関に刻印づけられてくる。一方で、②歴史的世界を体験の側面から見れば、精神科学は、複合的作用連関、「無限で始源的な牽連」[Komplex]、これを諸要素の意味や我々の目的に従って境界づけるもの、「具体的作用連関」[konkreter Wirkungszusammenhang]から様々の観点と方法的分析を用いて「個別諸連関」を抽出するもの、これである⁽¹⁷⁾ (GS, VII, 158)。つまり、精神科学により、精神的世界又は作用連関が、「諸々の継続的創造物」——像、彫像、戯曲、哲学体系、宗教文書、法典——として、分解と総合を通じて獲得され (158)、或いは、具体的作用連関は、「最も単純な同質的作用連関」——教育、経済生、法、政治的諸機能、宗教、社交性、芸術、哲学、科学——として、分析と孤立化を通じて分離される

(166)。しかも、生成過程としては、この創造物又は個別連関は、価値実現を目指して規則に従い目的を立てる諸個人の間の「共作用」を起点に、「人間間の諸関連の体系」となり外化してくるのだが⁽¹⁶⁾ (154)、この「諸個人の継続的關係」には、悉く、統握作用、価値付与作用、目的定立の間の「構造的関連」が貫流している (154)。歴史的世界から抽出される、「諸個人」、「文化体系、共同体」を支えているのは、「現実統握作用、価値づけ、財の創造」を一つの全体に結合する構造連関であるし (154)、更に、精神的世界から区分される「諸々の、国民、事態、歴史的時期」を担っているのも、「諸々の、目的、価値、思考作用」の構造連関である (155, 159)。要するに、科学、精神科学は、人間の歴史的世界を、生現実の個別態として、「對抗させ区分し分類する手続」で確定してくれるのである (V, 280)。

他方で、③歴史的世界を了解の側から見れば、精神科学は、概念と論理で区切られた社会的歴史的現実の断片を我々に提示して、この部分的現実を通じて歴史的世界を貫流する作用連関を見えるようにさせるもの、これである (GS, VII, 309)。つまり、精神科学の了解を通じて、社会の外的組織、文化の諸体系など諸形成体に伏在する人間体験の生動性が、背後に眺望可能となる。当然、了解には、要素的了解、高次的了解、追体験、加えて、解釈術又は解釈学に定礎される解釈又は釈義など多様の了解があるが、ここでは、「継続的に固定された生諸外化の技術的了解 [kunstmäßiges Verstehen]」、即ち、精神諸科学の「概念の釈義」が重視され、当該概念のそれが登場した連関への対応と組込みにより解釈の目的達成が目指される (VII, 309f.)。例えば、法命題の了解では、法典の諸法命題を相互に結合する「論理的連関」が浮上し、シェイクスピア喜劇の了解では、筋書きの諸構成部分を相互に結合する「統一体」が浮上し (156, vgl., 268)、国家や教会など「体系的組織の解釈学」でも、共通精神と統一的生形式の「構造連関」が浮上してくる (265)。精神諸科学の客観性は、その概念の作用連関全体内部での再現で実現され、

客観的認識の成功は、当該概念を通じた我々への作用連関の提示を惹起してくる。要するに、精神科学も、人間的歴史の個別態の了解を媒介として、我々の現存在の地平を、歴史的世界の全方面へと拡張してくれるのである。(242, Fn. 265)。

体験・表現・了解の内的連関の中で、精神諸科学のこのような位置づけからすると、「体験と精神科学」とは、精神科学が、体験により担われる歴史的社会的現実を、概念と論理を通じて、その部分と断片を表現したものであること、そして、同時に、精神的世界を貫く作用連関又は構造連関を、精神科学上の諸概念の了解を媒介として、我々に明るみに出すものであること、と理解することができる。つまり、「体験と精神科学」の関係とは、現実と現実全体を示唆する精神科学の関係である。

(3) 「精神諸科学の特徴」テイルタイは、生現実の統握が「生経験、芸術、科学的思考の不可分の結合」により条件づけられ (GS, V, 274)、人間世界の意識化が「芸術、歴史学、抽象的諸科学」の協力により可能となるとして (276)、詩作と科学とを相互に孤立化させている訳ではないが、「体験と詩作」、そして「体験と精神科学」の関係が以上のようなものとすれば、我々をしてコメントからテイルタイへと方向転換せしめた視点、即ち、「体験と詩作」と「政治的体験と国家思考」の平行関係を視野に入れた場合、精神諸科学一般の特徴は、次のように結論づけられよう。

まず、第一に、精神諸科学は、歴史的社会的現実から、科学、国家、法など形成体をその断片に切出し把握するものである。従って、文化体系、外的組織、法を了解する為には、これらの、その析出されてきた歴史的世界それ自体、全体的現実それ自体への関連づけが必要となる。精神諸科学は、単なる比較科学ではなく、同時に現実科学でなければならない。次に、第二に、精神諸科学は、継続的創造物である、科学、国家、法などの背後に、統握作

用・価値づけ作用・目的定立作用、この三種の心的作用の構造連関を眺望し透視するものである。従って、これら客観的精神を了解する際には、この認識だけでなく、価値づけ、目的設定、規則定立も同時に行うことが肝要となる。精神諸科学は、単なる事実科学ではなく、同時に規範科学でなければならぬ。そして、第三に、精神諸科学は、科学、国家、法を通じて対象とする社会的歴史的现实の彼方に、意識の諸事実としての心的生、体験それ自体に己れを投錨するものである。従って、精神諸科学が真の意味で基礎づけを獲得するには、単に歴史的世界を分析記述するだけでなく、意識の諸事実の分析記述を同時に行うことも不可欠である。精神諸科学は、単なる現実科学ではなく、同時に経験科学でなければならない。

だがしかし、精神諸科学が現実科学であり規範科学であり経験科学であるのも、翻って考えれば、精神諸科学の中で体験・表現・了解の連関が歴史的世界を編み上げているからである。了解が表現を讀取り、了解がその背後の歴史的世界全体を汲出そうとするからこそ、精神諸科学は現実科学となり、表現が体験を外化し、表現が心的生の心的構造連関を反映せんとするからこそ、精神諸科学は規範科学にもなり、体験が了解を充填し、体験が歴史的社会的现实全体を己れの内に担うからこそ、精神諸科学は経験科学となる。歴史的世界の編制に従事する、この精神諸科学からすれば、大切なのは精神科学の「方法」ではなく、この方法を基礎づけ、更に論理学、認識理論さえも基礎づける、体験・表現・了解連関に入り込む行態、いわば方法態度こそが肝心である。これこそが、我々が求めて来た「精神科学的方法」[geisteswissenschaftliche Methode]に他ならない。「精神科学的方法」とは、それに値を代入すれば後は論理操作だけで解答を得られる計算式でも、それに準拠すれば後は自動的に目標が果たされるマニュアルでもなく、この方法さえも基礎づける、歴史的社会的现实が歴史的世界となって眼前に開けてくるころの、精神諸科学の基盤的方法態度のことと考えねばならない。

(4) 「小括」結局のところ、デイルタイの見解では、精神諸科学の心理学的解釈学的基礎づけの観点からすれば、詩作は、歴史的社会的現実を己れの内に担う体験、心的生の構造連関を、言語上の全技術を駆使して表現したものと理解され、そして、科学も、同じく意識の諸事実に集約される人間の社会的現実、心的統一の構造連関を、範疇と論理により部分的に切出したものと把握される。このような体験と詩作、体験と科学の両関係からすれば、精神科学は、全体的現実、心的構造連関、体験そのものに定礎されるという点で、ひとまずは、現実科学、規範科学、経験科学と特徴づけられ、その在り方を体験・表現・了解連関に悉く規定されるという点で、「精神科学的方法」を根本原理とするであらう。

四 小 括

詰まるところ、ここでデイルタイが主張するのは、了解と解釈学が、体験と心理学に豊富な素材と間主観性を補充するものとして、要請され、この了解作用は、概念、行為、体験表現という客観的精神の、要素的了解、高次的了解、追体験、更に、解釈術と解釈学に定礎される了解として、把握されること、尤も、この了解と解釈学は、確実性を保持せず、体験と心理学による補充を必要とし、故に、精神諸科学は、その認識理論から方法論に至るまで、体験と了解、心理学と解釈学の相互依存関係により、即ち、体験・表現・了解の内的連関により定礎されること、そして、体験と詩作は、全言語を用いた空想による体験の表現と、作品了解を媒介とする体験の拡張という関係として、体験と科学は、概念による部分現実の区画確定と、形成体了解を媒介とする構造連関の再現という関係として、それぞれ規定されること、これである。

4 小 括

以上、デイルタイの精神諸科学の基礎づけの戦略を検討して明確になったのは、諸々の精神諸科学が、歴史的社会的現実を考察対象とし、概念と論理によりこの部分的現実を分析記述する科学であること、しかし、この現実全体を担うのが意識の諸事実たる心的生全体であり、この全精神諸科学を支えるのは表象・感情・意志の心理的構造であること、しかも、この心的生を補うのが客観的精神とその了解であり、結局、精神的世界全体を造るのはこの心的生の体験と生外化の了解の相互作用であること、これである。このような意味で、心理学と人間学、文化の諸体系の諸科学、社会的組織の諸科学、これらは、心理学に基礎づけられ、解釈学に基礎づけられ、現実科学と理解される精神科学となる。そして、この精神諸科学をして歴史的世界を編制せしめる、体験・表現・了解連関という精神態度、これこそが、「精神科学的方法」であると言わなくてはならない。

しかし、このように、デイルタイ哲学の概略が提示されたとしても、グイレクトにスメント理論の全貌が導き出されはしない。デイルタイ自身は、哲学者である前に個別科学者であるが、精神史家、教育学者、倫理学者であつても、法学者、ましてや、国家学者、憲法学者、国法学者ではない。スメント自らが残したデイルタイ哲学の痕跡、「体験と詩作」の意味が解明されたとすれば、今度は、スメント理論における「政治的体験と国家思考」の意味、「精神科学的方法」の意味を解明しなければならぬ。つまり、スメント理論全体からデイルタイ哲学に遡行し、精神科学の秘密が発掘されたとすれば、今度は、デイルタイ哲学からスメント理論全体に帰還し、スメント憲法理論の謎を解読しなければならない。

(79) 拙稿「政治的体験の概念と精神科学的方法」(二二〇〇年) 四四七―四九三頁。

(80) 拙稿「政治的体験の概念と精神科学的方法」(四) 早稲田法学七五巻四号(二〇〇〇年) 二五五―三〇〇頁。

(81) 以下で主として検討するのは、後期アイルタイ作品の中で特に重要な、全集七巻所収の「精神諸科学の中の歴史的世界の編制 [Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften]」(GS, VII, 77-188)であるが(なお、拙稿(前掲注80)二九五頁注55)、『序説』には、自明な故か通例殆ど論及されぬ、この作品の全体構造を概観しておく。

この「編制」は全三部から成る。まず、①第一部「精神諸科学の境界づけ」では、自然諸科学との対比から、体験・表現・了解の精神行態が精神諸科学の本質を規定することが、全体予告として、呈示される(GS, VII, 79-88)。次に、第二部「自然諸科学の編制と精神諸科学の編制の差異」では、自然諸科学固有の態様、構成との対比から、歴史学派の展開史で精神諸科学の歴史的性格が顕現することが、詳述される(88-120)。中期アイルタイ『精神科学序説』一巻にはば対応するのが(拙稿(前掲注79)参照)、この第一部と第二部と思われる。そして、②「編制」全体の質量面面で最重要部分となるのが、全三篇から成る、第三部「精神諸科学の連関に関する一般的諸命題」である。このうち、第一篇「対象の統握作用」と第二編「精神諸科学の構造」第一章との中で、対象の統握作用を中心に、心的生から、内的連関と構造連関を経た、精神諸科学の生成の諸段階が順次検討される(120-129, 130-138)。『序説』二巻第三部にはば対応するのが(拙稿(前掲注80)参照)、(第三部)の第一編と第二編一章と思われる。加えて、③第三部一篇から、第二章「精神的世界が与えられる、手続諸態様」では、心理学と解釈学の協働関係(138-146)、第三章「生の客観態」では、解釈学での了解作用と生外化(146-152)、第四章「作用連関としての精神的世界」では、精神諸科学の対象たる作用連関が(152-188)、それぞれ検討される。今回の「精神諸科学の解釈学的基礎」は、この(第三部第二編)の第二章から第四章を検討する訳である。尤も、解釈学の概要を示す第三章、体験と了解の連関を記す第二章の順序で行論を展開し、また、精神諸科学の体系構築を試みる第四章は前述の「精神諸科学の基礎づけの必要性」(拙稿(前掲注79)四六三―四七六頁参照)での論及に代替可能である。なお、後掲注III。要するに、④精神諸科学の現実科学的性格の摘示、精神諸科学の心理学的基礎づけ、精神諸科学の解釈学的基礎づけを、巡回する構え、これが『編制』の全体構造となる。加えて、⑤同じ全集七巻には、「精神諸科学の基礎据えの為の第一研究」、「第二研究」、「第三研究」(拙稿(前掲80)二九五頁注55)の他に、「編制の為の統編の計画 [Plan der Fortsetzung zum Aufbau]」(189-291)、第三研究の草稿を含む「補遺 [Anhang]」も収録される(293-347)。七巻編者ヘンリー・トウゼンは、この「統編の為の計画」をアイルタイ自身が上巻「再検討の諸プロジェクト [Projekte einer Umarbeitung]」と予定した点から、これを「編制」上巻に追加される単なる「下巻」と見てはならないとする(357)。この「計画」のうち、「他の諸人格とその生外化の了解作用」(205-220)は、一九一〇年学士院報告、即ち「精神諸科学の基礎据えの為の第四研究」に該当

し、ディルタイ「解釈学」の核心提示として特に重要な論稿と見なされた作品である(353, 360)。

なお、本稿では「Aufbau」に訳語「構成」を当てている慣行に従わず、これに訳語「編制」を暫定的に当てている。従来の「構成」では、ディルタイが自然科学固有の方法とし、しかも通例訳語「構成」を当てられるKonstruktion——Konstitutionを「構成」としてKonstruktionを「構築」とする場合もあるが(『カント事典』(弘文堂、一九九八年)参照)——と、彼が精神科学固有の態様とする(時には精神／自然科学のそれぞれの態様とする)Aufbauとが、完全異質の概念でありながら、共通訳語を獲得するようにならなければならない。

(83) 心理解の諸限界について Jung-Uk Choi: Die geistig-gesellschaftliche Krise des 19. Jahrhunderts und die Aufgaben der Diltheyschen "Kritik der historischen Vernunft". 1987, S. 280f., Hans Ineichen: Erkenntnistheorie und geschichtlich-gesellschaftliche Welt, 1974, S. 200, Matthias Jung: Dilthey zur Einführung, 1996, S. 131-138.

(83) ディルタイは、内観重視の「実験心理学」[experimentelle Psychologie]の誕生は「外的知覚の方法」周囲を伴う表象作用とから自然科学的観察の方法を持ち込んだ結果であるとする(GS, VII, 198)。

(84) なお、意志作用と表象作用の関係については拙稿(前掲注80)二七二—二七三頁。

(85) 「解」解釈一般については Ludwig Landgrebe: Wilhelm Diltheys Theorie der Geisteswissenschaften, in: Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd. 9, (1928), S. 237-366, Choi, a.a.O. (Ann. 82), S. 289-293, Jung, a.a.O. (Ann. 82), S. 167-174, Ineichen, a.a.O. (Ann. 82), S. 217-222, Helmut Johach: Handelder Mensch und objektiver Geist, 1974, S. 134 f., Otto Friedrich Bollnow: Dilthey, 1936, 4. Aufl., 1984, Hans-Georg Gadamer: Wahrheit und Methode, 5. Aufl. (Gesammelte Werke, Bd. 1), 1986, S. 258-269, 270-276, 281-296. Vgl. Klaus-Peter Lange: Zum Begriff der Einführung, in: H. Koopmann/J. A. Scgnnik gen Eisenwerth (Hrsg.), Beiträge zur Theorie der Künste im 19. Jahrhundert, Bd. 1, (1971), S. 113-128.

(86) 主外在「客観的精神」については Landgrebe, a.a.O. (Ann. 85), S. 237-366, 277-302, Ineichen, a.a.O. (Ann. 82), S. 217-222, Choi, a.a.O. (Ann. 82), S. 283-288, Jung, a. a. O. (Ann. 82), S. 147-160, Johach, a. a. O. (Ann. 85), S. 111-115, 156-165. Vgl., Hans Freyer: Theorie der objektiven Geistes, 2. Aufl., 1924.

なお、ディルタイは、己れの「客観的精神」を「ゲーテルの「客観的精神」とは、「概念の体系的地位」を「標的と範囲」[Abzweckung und Umfang]の二つの点で、全く異質である」と注意を促している(GS, VII, 148f., vgl., V, 180, VII, 86)。

①ヘーゲル体系においては、客観的精神は、精神の発展の中「主観的精神と絶対的精神」の間の「一段階」として位置づけられる (VII, 149)。世界精神が、「主観的精神 [subjektiver Geist]」の段階で、「多様な個別諸精神 [Mannigfaltigkeit der Einzelgeister]」として登場すれば、続いて「客観的精神の段階で」、法・道徳・人倫で実行される、この一般的理性的意志の客観化として出現し、最後に「絶対的精神 [absoluter Geist]」の段階で、芸術・宗教・哲学で展開される、精神の精神自身についての知識として顕現する (149f.)。要は、主観的精神と並び、客観的精神は、精神の最高実在としての絶対的精神形成の爲の「道」と見なされる (149f.)。しかし、このヘーゲル精神哲学は、客観的精神を、「一般的理性的意志」から「解し」、「理念的構成 [Ideeale Konstruktio]」に填込む、単なる「形而上学的」解明に過ぎぬ (150)。加えて、②ヘーゲル哲学では、客観的精神として順次提示されるのは、「法・道徳・人倫」、そして「家族、市民社会、国家」であり、絶対的精神としては、「芸術、宗教、哲学」である (149)。精神が精神自身を自覚的に捕捉する絶対的精神は、絶対者の単なる自己展開ではなく、そのようなものとしての客観的精神から除外される。しかし、このヘーゲル精神哲学の、理性的意志「一般的理性 (151)」、理念的構成が無意味であれば、客観的精神と絶対的精神の区別も不必要となる (150f.)。結局のところ、③ティルタイは、「体系的地位」の点では、「絶対的精神に至る精神の発展を排去して、客観的精神を「生の実在」、「心的連関の全体性」、「歴史の現実」から把握することを要求し (150)、「標的と範囲」の点では、芸術、宗教、哲学の特別視を放棄して、「これらを客観的精神として把握すること」を要請する (151)。Vgl., Johach, a. a. O., S. 166-173, Jung, a. a. O. (Ann. 82), S. 147-160, 154f., Anne Homman : Diltheys Bruch mit der Metaphysik, 1992, S. 311-325, 丸山高司『人間科学の方法論争』(勁草書房、一九八五年)。Vgl., Gadamer, a. a. O. (Ann 85), S. 222-225.

なお、バルトルシユベルガーは、厳密にはハルトマン客観的精神論を介してだが、このティルタイ客観的精神論を単なる超個人的形成体として解して、強引にも、これとスメント国家理論を比較しようとする。Richard Bartschperger: Die Integrationslehre Rudolf Smends als Grundlegung einer Staats- und Rechtslehre, 1964, S. 26-32, 58-126.

(87) 麻生建『解釈学』(世界書院、一九八五年)一六六頁。Vgl., Choi, a. a. O. (Ann. 82), S. 290, Ineichen, a. a. O. (Ann. 82), S. 220.

(88) この「類推」とは、特定の外的過程と内的状況の結合を前提に、「この外的過程と「類似性」をもつ外的過程から、同様の内的状況へと移行する推論を指す (GS, V, 277, XIX, 223-225)。尤も、後述の追体験を始め、「了解全般が「内」した論理的操作で汲み尽くせない」「謎に満ちた事態」である点は、ティルタイが繰り返し強調するところである (V, 277, VII, 205, 218)。なお、後掲注90。

(89) なお、対象的統握作用が、常に完全な統握を目指し無限の任務を継続遂行すると同様に（拙稿（前掲注80）二九五―二九七頁注57）、了解の試みも、「諸々の生外化の中に含まれる、全体的意味が汲み尽くされる迄」進行する運命をもつ（GS, VII, 227, 147）。

(90) 従って、デイルタイには、了解分析に依拠した普遍妥当の解釈の科学という意味での「解釈学」、これへの彼独自の体系を記録する論稿はないと見て良し（Vgl. GS, VII, 309f.）。シヨルツによると、デイルタイによる解釈学への論及は、シュライエルマッハー財団の懸賞論文、即ち「シュライエルマッハーの解釈学体系——従来の解釈学との対決」[Das hermeneutisches System Schleiermachers in der Auseinandersetzung mit der älteren Hermeneutik]（一八六〇年）（XIV, 595-787）と「解釈学の成立」（一九〇〇年）（V, 317-338）など解釈学の歴史的研究に限定され——頻繁に援用されるこの「解釈学の成立」論文は、「深く且つ普遍妥当な了解作用」の必要から「文献学的熟練」が成立し（ギリシャ）、ここから、当代の科学状況上の目的に従う「規則定立」、諸規則秩序への提示の学、解釈学が成立し（ルネサンス期、フラキウス、最後に、了解作用の分析を基礎に「規則定立の為の確実な出発点」の解明が志向されるといふ（ドイツ観念論期、シュライエルマッハー）、先に言及済みの、了解↓解釈術↓解釈学に至る展開史の考察にはほぼ限定されたものである（321-331）——、哲学体系や精神諸科学の基礎据えの為の諸草案でも、「解釈学」の表題をもつ独立の章は全く存在しない。デイルタイは「解釈学者」[Hermeneutiker]と呼ばれるが、彼自身は「解釈学」を「残してはならない。Gunter Scholtz: Was ist und seit wann gibt es "hermeneutische Philosophie"? Diltthey Jahrbuch, Bd. 8, (1992/93), S. 93-119, 101f. und Fn. 23, ders.: Dialektik und erkenntnistheoretische Logik. Schleiermacher und Diltthey, in: ders., Ethik und Hermeneutik. 1995, S. 235-257, 235.）の他「ミッシュにより、デイルタイの解釈学史論文として」「精神諸科学の自然的体系」(II, 90, 113ff.)「詩学」(VI, 103ff, bes.)も挙げられる（V, 426）。尤も「シュライエルマッハー解釈学の肯定的言及がデイルタイ解釈学解明の入口となるのは否定できない。デイルタイは、シュライエルマッハー解釈学を、「創造的能力」[schöpferisches Vermögen]と関連つけた「了解作用」の分析（V, 327）をこぼして、ここからの「普遍妥当の解釈の可能性」とその「諸々の補助手段、限界、規則」の導出（327）加えて、聖書解釈学、法解釈学、古典解釈学を代替する「一般解釈学」の構築の諸点で（326）「解釈学の科学的確立の先駆者であると評価する。Vgl., Gunter Scholtz: Hermeneutik und Dogmatik, in: ders., Ethik und Hermeneutik, 1995, S. 193-211.）だが、これには、デイルタイが確認した「シュライエルマッハーによる超越論的哲学の援用と、デイルタイ自身による超越論的哲学の断固拒否との矛盾関係が、疑問として残る。拙稿（前掲注80）二五九―二六

三、二九二頁注42。Vgl., Gadamer, a. a. O. (Ann. 85), S. 244.

- なお、ティルタイは「この解釈学史の文脈で「 hermeneutischer Zirkel」問題に論及する。彼によると「一六世紀の聖書解釈学者フラキウス [Fracius] が、作品中の個別の場所は「作品全体の意図と構図 [Komposition]」から解釈されねばならぬ」との「解釈の心理学的又は技術的原理」を打ち出し (GS, V, 325) また、シェライエルマンは「ある作品の全体」は個別の言葉とそれらの結合から「解せねばならぬ」反対に「個別の全き「解」は全体から獲得されねばならぬ」という「全ての解釈術の中心的困難」即ち「循環」問題を抽出した (330)。尤も、フラキウス解釈学には、アリストテレス修辭学のメラニヒトンの改鑄の制約、要は、修辭学的伝統の拘束の点で、問題があり (325) 、「了解の論理学的取扱いは、全ての了解に内在する「非合理的なるもの」の再現は望み得なから以上 (VII, 218, Vgl., 205, V, 277) 、「シェライエルマンの循環問題にも」了解過程の「論理学的側面」の過度の強調の点で、難点が残る」といわれる (V, 330)。Vgl., Gadamer, a. a. O. (Ann. 85), S. 177-201, ders., Vom Zirkel des Verstehens, in: ders., Gesammelte Werke, Bd. 2, 2. Aufl., 1993, S. 56-65, 57) の問題は我々「周知の法学的解釈学に関連」して「ある」。Vgl., Arthur Kaufmann: Gedanken zu einer ontologischen Grundlegung der juristischen Hermeneutik, in: ders., Beiträge zur Juristischen Hermeneutik, 1983, S. 89-99, 91f, ders., Rechtsphilosophie, 2. Aufl., 1997, S. 44-46, Ulrich Schroth: Philosophische Hermeneutik und interpretationsmethodische Fragestellungen, in: W. Hassener (Hrsg.), Dimensionen der Hermeneutik, Arthur Kauffman zum 60. Geburtstag, 1983, S. 77-89, 77, 80.
- (91) 勿論「この精神諸科学の基礎学としての解釈学は「解釈学の「認識理論的諸問題」「論理学的問題」「方法論」と、その各種論点につき、論及されているが (GS, V, 333) 、「それでもやはり、これら個別論点は示唆的断片的なものに止まるから、本稿では「解釈学」とりわけ「了解一般の分析」(VII, 219, V, 320, 329) 、「了解の「認識理論的」論理学的「方法論的分析」(333) が、精神諸科学の心理学的基礎学据えに間主観性を付与する任務の一翼を担う点の確認で満足するにしよう。
- (92) 解釈学と諸限界について Choi, a.a.O. (Ann. 82), S. 292f. Vgl., Otto Friedrich Bollnow: Grenzen des Verstehens, in: ders., Studien zur Hermeneutik, Bd. 1, (1982), S. 103-113, 108f, 110-113.
- (93) ティルタイによると「了解作用の三つの難問を意識化すれば、了解の認識理論・論理学・方法論上の分析がもつ意味を把握できる (GS, V, 333) 」。つまり、①個別態の客観的認識は如何に可能か、②個別からの全体の認識、全体からの個別の認識は如何に可能か、③個別的心的生の外的環境からの認識は如何に可能か、といふ三つのアポリアである (333f)。

- (94) 拙稿(前掲注80)二五六一―二五八頁。
- (95) 拙稿(前掲注80)二五八―二六一、二七二―二九〇頁。
- (96) 勿論、体験と表現の相互作用への着目は、表現の輕視を帰結しない。意図の有無と無關係に精神を外化する表現という媒介項の存在をまづ、了解が開始するのであり、その意味で、体験と了解を架橋する(GS, VII, 309)。また、体験の中で意識されずに出現するものが心的生の深みから汲み出され(206, 325f.)、心的生の中の意識の諸事実が了解に耐える固定性を獲得するには(328f.)、表現されるのが必須であり、その意味で、表現は、体験と了解の前提でもある。
- (97) この『』は「歴史的なるものと体系的なるものとの双面的依存」關係は、精神諸科学の歴史の中でも確認可能である(GS, VII, 143f.)。例えば、トウキユディヤスとポリュピオスの歴史記述は、ソフィスト期国法学とローマ期政治術[*ganze politische Weisheit der römischen Aristokratie*]に刻印づけられ、マキヤニリとグイッチアルディーニ[Giuchardini]の歴史叙述も、フインツェ・ヴェネチアの国家術[*Staatsweisheit*]に於ける古典諸理論の革新発展に染色され、エウセビオス[Eusebios]や、ネアンター[*Neanter*]とリッチェルの教会史叙述も、宗教プロセスと教会法の体系的概念に支持されており、更には、ヘーゲル歴史哲学やランケ歴史学も——その他、ヴォルフ、ニーブール、シュライエルマッハー、パウアーなども——、法科学など新成立の精神諸科学、体系的思考の多様源泉に依拠している(143f.)。
- (98) 体験・表現・了解の連関に『』Reichen, a.a.O. (Ann. 82), S. 196-200, Johach, a.a.O. (Ann. 85), S. 161f., Jung, a.a.O. (Ann. 82), 160-174.
- (99) この固有の手續又は固有の行態が、「歴史的世界に対する統一的關係」としての「歴史的意识」[*geschichtliches Bewußtsein*]による(GS, VII, 106, 145, VIII, 8f.)。
- (100) 「精神的世界の編制」[*Aufbau*]とは、「体験作用と了解作用を基礎として、諸能作連続が展開する中で、歴史的世界に関する客観的知識が、拡張を伴うながら、その現存在をもつものの『理念的連関』の中にされる(GS, VII, 88)」。なお、前掲注81。
- (101) 自然科学と精神科学の關係に『』Johach, a.a.O. (Ann. 87), S. 131-137, 186f.; Manfred Riedel: *Einführung*, in: W. Dilthey, *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*, 1970, S. 9-80, 68f.; Otto Pöggeler: *Einführung*, in: W. Dilthey, *Das Wesen der Philosophie*, 1984, S. vii-xlvi, xvi, xvii; Josef Meurers: *Wilhelm Dilthey's Gedankenwelt und die Naturwissenschaft*, 1936. Vgl., Gadamer, a. a. O. (Ann. 85), S. 240.

(102) なお、体験・表現・了解連関は、認識理論・論理学・方法論を単なる並列関係に据えるものではなく、また、これら論点を精神科学を汲み尽くす問題全体と見なすものでもない。詳述すれば、①第一には、デイルタイは、論理学を認識理論と方法論の間の「中間項」と考え、認識理論→論理学→方法論の発展線を見出す (GS, I, 116, 119)。一つには、論理学の客観性は無前提でないとするれば (拙稿 (前掲注 80) 二五八―二六一、二六四―二六六頁)、論理学は、概念推論的思考の諸法則のみ考究する「形式論理学」でなく、「概念推論的思考の背後にある諸過程の連関」も精査する実在論理学でなくてはならない (118, 後掲注 104)。もう一つには、こうした「論理学の観点の拡張」が施されれば、概念の批判的吟味には、「心理的諸作用の全体連関の、有効性と射程範囲」の認識理論がなくてはならない (118)。そうなるを、論理学が、心理的諸事実の態様と明証性に関する「認識理論的探究」と「精神諸科学の現実的方法論」を媒介する役割を獲得することになる (119)。拙稿 (前掲注 79) 四五三―四五五頁、Choi, a.a.O. (Ann. 82), S. 234. そして、②第二には、デイルタイは、認識理論・論理学・方法論に限定せず、精神諸科学の「全ての特徴」が体験・表現・了解連関により規定されると考える (VII, 87)。最初に、この連関により確定されるのは、個別性と共通性の特別関係、理論命題・価値判断・目的諸概念の結合関係、その他、精神科学固有の「嚮導的な全ての概念」であるとされる (87, vgl., 71)。加えて、この嚮導的な概念に包含されるものとして、自然科学とは別様の「実在性」概念、自然科学とは別種の「諸範疇」、自然科学とは「別の意味」をもつ「知識の客観性」概念、そして、自然科学「本質的に異質」の「諸方法」が列挙される (71, vgl., 152)。

(103) デイルタイは、「精神諸科学の客観的知識」の可能性を問うことが、精神諸科学の一般的論理構造の解明、個別領域での精神的世界の編制の解明と並ぶ、精神諸科学の基礎据への「三つの任務」の一つであると示す (GS, VII, 120f, vgl., 3, 4, 7f, 12 f., 88, 261, 295, 305, 318, 332)。尤も、周知の如く、この精神諸科学の客観性の論点は、カタマーなど、自然科学を模倣した客観主義との批判が展開された舞台であった。Gadamer, a.a.O. (Ann. 85), S. 9-15, 235-246, 258, 263, ders., Das Problem der Geschichte in der neueren deutschen Philosophie, in: ders., Gesammelte Werke, Bd. 2, Aufl., 1993, S. 27-36, 渡邊|郎『構造と解釈』(4)へ#著書文庫 一九九四年) 一〇八―一〇九 三三―三頁。Vgl., Fritthof Rodt: Traditionelle und philosophische Hermeneutik, in: ders., Erkenntnis des Erkannens, 1989, S. 89-101, 95f. auch, Otto Friedrich Bollnow: Zur Frage der Objektivität der Geisteswissenschaften, in: ders., Studien zur Hermeneutik, Bd. 1, 1982, S. 13-47.

因みに、デイルタイによると、精神諸科学の発展は、同時に精神諸科学の自己反省、或いは客観的認識の自己反省でもある。つ

まり、トゥキエディテス、ポリュビオスは、精神諸科学的知識の本性に関する「省察」の端緒であり (GS, VII, 313f)、「飛んで近代では、神学での解釈学研究、歴史での批判学研究など、個別領域での知識省察の拡大時期であり (314)」、特に「一八世紀は、ウィニコとヒュームの歴史、歴史哲学に顕著な如く、人間本性の認識定礎をめぐる、論争対立登場の時期であり (314)」、また「一九世紀は、自然学派と歴史学派の対立に顕著な如く、「精神諸科学の自己省察」、「精神諸科学体験の哲学的基礎づけ」をめぐる、論争対立激化の時代である (314)」。つまりは、継続性をもって、精神諸科学の知識根柢、論理構成、手続と方法、これらに哲学的意識の網をかぶせる任務が、成立して行く (314)。

(104) デイルタインの論理学に「*die* Gundrun Kühne-Bertram: Logik als Philosophie des Logos. Zu Geschichte und Begriff der hermeneutischen Logik, in: Archiv für Begriffsgeschichte, Bd. 36, (1993), S. 260-293, 263-266, Riedel, a.a.O. (Anm. 101), S. 61-63, Renate Knüppel: Diltheys erkenntnistheoretische Logik, 1991, Hans-Ulrich Lessing: Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft, 1984, S. 249ff.

因みに「この論理学は、認識理論への主知主義と現象主義批判と連動して (拙稿 (前掲注80) 二五九―二六一頁)、「論理を経験や感覚に還元する経験論理学 (ミル)」、論理に独自領域を承認し論理と経験の二元論を前提する合理主義論理学 (カント、ロツツェ、シグヴァルト)」、これら一九世紀を代表する論理学二学派に抗して展開された、「論理を経験内在秩序と把握する」「分析論理学 [analytische Logik]」確立を目標とするのである (GS, V, 74-89, bes., 74-86, XIX, 333-388, bes., 361, 366-368)」。つまり、「精神科学の論理学は、論理的態様の抽象的諸表現、又は、アプリオリに生に適用される「全ての現実についての言明諸形式」に過ぎぬ」「形式的諸範疇」のみでなく (VII, 197, 192, 232)、「生本質自体に内在し」、生の諸部分を支配し、生と歴史の世界に固有の諸範疇、即ち「実在的諸範疇」探求の学でなくてはならぬ (VII, 232, 73, V, 86-89)。

(105) 拙稿 (前掲注80) 二七八―二七九頁。

(106) Vgl. Choi, a.a.O. (Anm. 82), S. 255-268, 274-293. 精神科学方法に「*die*、数多くの文献があるが、差し当たり、Otto Friedrich Bollnow: Die Methode der Geisteswissenschaften, in: ders., Studien der Hermeneutik, Bd. 1, 1982, S. 114-138, 121-125.

(107) この一般的知識と単教的知識の双面的依存関係に類型の問題が伏在する (Vgl. GS, VII, 213)。なお、拙稿 (前掲注80) 二九三頁注47。

(108) 従って、自然科学と精神科学の区分問題に、「科学の内容ならぬ」「認識諸目標の形式的性格」の観点から、自然科学を「一般法政治的体験の概念と精神科学的方法 (五) (三宅)

則探究の「法則定立的 [nomologisch]」科学」とし、精神諸科学を「特別の歴史的諸事実」探究の「個性記述的 [ideographisch]」科学とする解答を提出する。ウィンデルバンツら新カント派は (Vgl. Wilhelm Windelband: *Präludien*, Bd. 2, 1924, S. 136-160) デイルタイから見れば、歴史の世界の中の普遍と個別の結合を看過して、全精神諸科学の固有連関を破壊することになる (GS, V, 256f.)。Vgl. Riedel, a.a.O. (Ann. 101), S. 69f. 尤も、精神科学の区分問題で新カント派とデイルタイを連続的に見る解釈が主流のようである。渡邊二郎『現代の歴史的状况』(放送大学教育振興会、一九九五年) 一三九―一六九頁。

(109) この比較的方法につき、特に二点の補足が必要である。まず、①比較的方法という名称は、各学問領域での「等形式性」の探究と、差異性・個別性・段階性の探究と、大別二種類の方法を指示可能であり (GS, V, 303f.)。この二義は、ギリシャ時代の仮説立脚の方法を起点とした、一八世紀の自然科学な法則発見志向の比較的方法から一九世紀の精神科学独自の個別態探究志向の比較的方法への歴史的展開の中に表現されている (304-310)。そして、②比較的方法は、ギールケ法学 (GS, I, 73f, 113f, 拙稿 (前掲注 79) 四九二頁注 35) やボッフ言語学 (V, 269, VII, 99) ウィンケルマン神話学などで実際に応用される方法だが (I, 113f, V, 269, vgl. XX, 151f.)、これら精神諸科学の比較的方法は、元来が生物学の方法を——本来は精神科学と自然科学の系統態様の異質性を重視せねばならぬは勿論だが——精神科学固有の領域へ応用可能か吟味しつつ、導入されたものと見え (VII, 130) その痕跡は、比較的方法の法則発見志向から個別態探究志向への歴史的变化を、生物学と精神科学双方が、対応関係にもつことに残存している (V, 311-316)。

(110) 拙稿 (前掲注 79) 四三七―四三八頁。従って、自然科学と精神科学の境界線を対象と方法の観点に求める見解は、デイルタイからすれば、認識理論と方法論という二次的次元の把握に留まり、体験・表現・了解連関という根本的地盤に至らぬことになる。尤も、デイルタイ説を対象と方法による精神科学の境界づけと見る見解が主流のようである。渡邊二郎 (前掲注 108) 一四三―一四五頁、丸山高司「法則定立的・個性記述的」『岩波哲学思想事典』(一九九七年)。だが、再度強調すれば、自然諸科学と精神諸科学の関係は、「実在に関する関係でも、方法に関する関係でも、それぞれ異なる」(GS, VII, 276, vgl., 311)。

(111) ここで検討するのは、主として、「個別性の研究の爲の諸著書 [Beiträge zum Studium der Individualität]」(GS, V, 241-316) の第四章「人間的・歴史的世界の個別態の中の描写としての芸術」(273-303)、『編制』第三部第四章「作用連関としての精神的」世界」(VII, 152-188) である。尤も、「個別性研究」の当該箇所は、未完成となった箇所である (V, 242, Fn., 303, Fn., 422f.)。

(112) 拙稿 (前掲注 80) 二八二―二九〇、二八九頁。

(113) この詩作の創造作用それ自体の根底にも、体験と了解の交錯が潜んでいる。例えば、ゲーテの全詩作の基礎には「生と生の解釈」があり (BD, 154)、ゲーテは、一方で、ワイマール時代に体験の全てに究極最高の価値が付与され、イタリア紀行で自己陶冶と自己表現が実存中心に定礎され、芸術鑑賞や宰相執務や科学研究で自身の生自体に広いスペースが確保された程度に、生への関係、己れ自身との闘い、自己人格の意識をその核心に留め置いて (151-161)、他方では、世界の全部分から生の力と意義を讀取り、世界の全偉人から化体した人間性質の表現を聴取り、己れの全体験から生自身の特徴を嗅取るという趣旨で、生の生自身からの追思考、現存在の現存在自身からの解釈を据え置っていた (161-164)。

(114) 精神的世界の作用連関に「Johach, a.a.O. (Ann. 86), S. 146-155; Jung, a.a.O. (Ann. 82), S. 174-179.

(115) 拙稿 (前掲注 80) 二七二―二八一頁。

(116) 拙稿 (前掲注 79) 四六三―四七六頁。

(117) 拙稿 (前掲注 79) 四六八―四六九、四七二―四七三、四七五―四七六頁。

(118) 拙稿 (前掲注 79) 四六五―四六六頁。

付記 1

本稿は、一九九九年早稲田大学特定課題助成費による研究成果の一部である。

付記 2

諸般の事情により、今回をもって本稿の本誌連載を打ち切ることとした。これにより、既に予告し用意したスメント憲法理論の再構成に関する結論部分は公表停止となる。しかし、この部分については、本稿に関心を寄せて下さった読者の方々の期待に応えるべく、別途公表の機会を探ることとしたい。(三宅雄彦)